

雨宿りの箱庭 こころのケアと箱庭療法

森下 温美

(関西医療学園)

I. 問題と目的

本報告は、筆者が『雨宿りの箱庭』と名づけているDV (domestic violence) シェルターでの箱庭の第9報である。今回は特にこころのケアにおける箱庭について、その意味を再考してみた。

II. 事例の概要

クライアント(以下CIと表記)は35歳の被害女性である。保護されてから、あちこちで質問ばかりされ疲れてしまったので、箱庭だけしたいと希望して来室され、5つの箱庭制作によって、元気を取り戻された。

III. 面接経過

#1 箱庭①

おとなしく、気を遣う感じの人。何となく落ちついた作品で、大小の木々の表現のなかに力強く、よい動きが感じられたので、一週間に一回くらいのペースで継続する約束をした。個人ファイルを見て、背景を知ろうかと思ったが、夢を思い出してやめた。

#2 箱庭② 1週間後

「くま、適当にやってください」と言うと、「はい適当にやります」と元気に応えられ、大型の動物が置かれ始めたのが意外であった。CI自身もどっしり安定した感じで集中され、「今日はこのくらいで」と完成を告げられる。パワーを感じたことを伝え、思い出したり思いついたりすることもあるようなのでと言うと、DVで遠方から来たことなどあれこれ話し出された。

#大寒波の日にすれ違ふ。 5日後

「歩くの早いんですね」と「ひたすら歩いていたので」とほぐれて微笑まれる。

#3 箱庭③ 二週間後

一週間前は、外出中とは聞いていたが、なんと帰省されていた。変わり映えがしないがというようなことを言われたので、ニュアンスがあるし、動きが出てきていること、真ん中の母子がいい感じだと伝えた。不思議なことに入所児たちの作品とよく似ている。

#4 箱庭④ 一週間後

当日行われた豆まきについて話しあったあと、箱庭を始め、「きょうはこんな感じで」と言う。置かれた家について何か言いたげだったので、

「この家いいでしょう」と言うと、少し元気が出てきた。木もたくさん植えられている。

#5 箱庭⑤ 一週間後

誘いに行くと、母親がいて、一緒に避難してきたのをこのとき初めて知った。急に眠気が来て「危険な状態だった」とゼスチャーで示されたので、「眠いとき来たらいいかも」と誘う。出来上がった作品に「あんまり変わらないけど、こんな感じで」といつものようにニコニコして示されたのは、結婚式のシーンであった。

#その後

一週間後、風邪をひかれたようで、マスクをして「今日は休む」と来室され、面接自体は、それきりになった。

IV. 考察

1. PTSDの時代

宮崎駿は、現代を不安と神経症の時代ととらえて『崖の上のポニョ』と『借りぐらしのアリエッティ』を描き出したが、DSM-Vも、PTSD 中心になるそうだ。ドイツ精神医学には、先天的な病の発想しかないが、クレペリンは気質としてもとらえられ、広島原爆PTSDを研究家リフトンはPTSDでも同じような症状が見られると考えた。人格障害として流行したものの背景には、児童虐待があり、独特の対人パターンはトラウマの再演に過ぎないとハーマンは指摘している。光源氏は、派手な行動ばかりが後世誤って伝わり、軽いイメージをもたれることを畏れていたし、柳田国男の『遠野物語』も、忘却をベースにした解離行動と幻想の物語であるという視点がないならば、雑多で無意味な物語に墮する。見立ては重要である。

2. こころのケア

①こころのケアとは

こころのケアとは、阪神淡路大震災で生まれたわが国独自の言葉である。応急処置のようなものであるが、PTSD 予防のために必要なものであり、自己治療力で治るのを支援することだから治療(キュア)にもつながるわけで、単なるカウンセリングマインドとは大きく違う魂のボランティアである。特殊であって特殊

でなく、ありとあらゆる人々が立場に応じて分担できるし、そうすることが期待される無我の具現化のような行為である。

②服喪追悼

PTSD 治療には、とりあえずは安全確保が大事だが、それだけでは『古事記』のササノフのように、父親が否認した宿業に被曝し、暴れさせられるようなことが起こる。DV シェルターでは、統合失調症の第一級症状作為体験やパニック発作、発達障害や睡眠障害・幻覚・拒食、脱毛から非行まで何でもありである。しかしそれは見かけ上の話であってすべてPTSDである。ハーマン(1996)のいう服喪追悼をすると、現実の見直しも起こり、内からエンパワメントされる。

③癒し

しかし、ハーマンは、外傷性記憶はことばを持たない凍りついた記憶であるとも言う。カルフは象徴が神経症的な自我分離を解消させると書いているから、箱庭の中で、古沢のアジャセコンプレックスのように蕩かされるとよいだろう。アリエッティと出会ったCIの作品には【解離】の次元の変化がみられる。

④傾聴が基本

まずは、自然に起こる悲哀反応を否定しないで聴く。解離性健忘症のかぐや姫は、優しい翁らに大切にされて記憶を取り戻し、本来の輝きを取り戻す。うそつき呼ばわりやわがまま扱い、アクチベーションシンドロームの危険性が高まる投薬や、適応論に墮させる指示的方法はご法度である。

⑤徹すると道になる

CIの無意識の目的は、筋を通すことだろう。苦難のなかでこそ、見立てをし、「百尺竿頭一歩進めよ」とばかりに変容してゆく気概を箱庭が後押しする。DVはアディクションというPTSDの一種で連鎖する。尾木ママこと尾木直樹さんは「叱ると二面性が出る」つまり、広義の二重人格を作ると言う。苦痛を緩和するための心的防衛機制が病理化する魔境である。DSM-IV TR(1994)で解離性同一障害となったDSM-III(1980)の多重人格はPTSDである。ドラキュラに噛まれるとドラキュラになるので、被害者と加害者の境目は微妙である。ニーチェ(1967)の言葉を借りれば、人は傷つけば、動物以下のレヴェルに墮ちることもあるが超人になる可能性もある。個性化のつり橋は渡るしかない。Thが余計なことをしなければ、岩がゴロゴロしていても、CIは問題を抱きしめ、どんどんダイナミックに深化しながら動き出す。

3. 象徴

皇后陛下美智子さまの著書『橋をかける』にはラポールの意味があるだろう。敗戦や震災、津波などの大惨事で国民が傷ついているとき、静かながら率先して動くのは象徴としての皇室である。日ごろから、ご公務と言え、陰陽五行説ベースのこころのケアであり、神話である『古事記』に起源がある。

4. 一太極二陰陽の再生の法則

箱庭療法についての誤解は、【見るなの禁】【心不可得】の二元論的な解釈や見立ての問題から起こっている。考えることなく考え、見ることなく見る。CIの作品もCIの現実も、変化していないようでも変化している。吉野裕子(1999)は、わが国の古典文学はみな【一太極二陰陽】の哲学的法則で貫かれていると言う。『源氏物語』はこころに留め置くことができずに書いたもので、まさに架空(現実と非現実に架かる)の話である。誰にでもある美点と欠点の五蘊盛苦であり、中国風であり中国風でないお経(縦糸・ニーチェの綱)の方便みたいなものである。ならば、傾聴態度も「♪誰が生徒か先生か」の『めだかの学校』のように上下の区別のないお遊戯で臨まねばならないだろう。Thがお目高になって二次被害の温床になっている救われのなさに、宮崎駿も警告を発している。

5. 華嚴の海印三昧

自らの内界にある明かりの灯る家と花々、【一即多】のシンフォニーにCIは元気づけられた。一太極二陰陽の根本を取り戻すと、「大死一番乾坤新たなり」で自己治療力が作動し、甦ることができる。干支の動物もCIを励ました。DV シェルターでは年中行事が人気であり、アイドル集団ジャニーズはバク転して、国民を元気付けようとするし、AKB48はじゃんけん大会をする。こころのケア自体が個性化の過程を歩んでいるのである。その時々は何もわからなくても、長い目で見ると海印三昧が見事に浮かび上がってくる。考えていないようでも考えながら、つかんでいるのである。日本中どこを切っても心可得である。

V. 文献

- ドラ. M. カルフ(1972) カルフ箱庭療法 山中康裕 他訳 誠信書房
 ハーマン(1996) 心的外傷と回復 中井久夫訳 みすず書房
 ニーチェ(1967) ツァラトゥストラはこう言った 氷上英 廣訳 岩波書店
 ロバート・J. リフトン(2009) ヒロシマを生き抜く 精神的考察 榊井廸夫訳 岩波書店
 吉野裕子(1999) 易・五行と源氏の世界 人文書院